

使徒言行録15:36~18:23

～堀川寛による広島弁訳～

(広島弁訳の意味) (訳者の解説・蛇足)

しばらくして、パウロはバルナバに言うたんよ。「おい、こないだ(この前)イエス様の福音を伝えた町へもう一回行ってみんか。ほいで、あんならが(彼らが)どうしようるか見て来ようやあ!」バルナバは、マルコと呼ばれとったヨハネも連れていきたいと思うとった。ほいじゃがパウロは、(こないだの伝道旅行の時に)パンフィリア州で勝手にいんでしもうた(帰った)ようなもん(者)は、連れて行きとうなかつた。ほいで二人の意見がはげしゅうぶつかつたけえ、結局別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れてキプロス島に向かう船に乗ったが、パウロはシラスを連れにして、主イエス様の恵みをゆだねられて出発したんよ。ほいで(陸路を行って)シリア州やらキリキア州やらを回り、教会を励ましたんと。

第16章

パウロは、デルベからリストラに行ったんじゃが、そこに、信者になったユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父親に持つ、テモテいう弟子がおったんよ。こんには(この人ば)、リストラとイコニオンの仲間でえろう評判がえかつた。パウロは、このテモテと一緒に連れて行こう思うたけえ、そこらに住んどるユダヤ人の手前、こんにに割礼(ユダヤ人の男性は全員割礼を受けた)を受けさせた。オヤジがギリシア人じゃあいうことを、みんなが知とったけえじゃ。パウロらはあっちこちの町を回って、エルサレム会議で決まったこと(異邦人クリスチャンはユダヤ人の律法を守らなくても良いが、偶像に献げた肉には注意するように)を守るように伝えたんよ。(パウロの訪問によって)教会の信仰が強められ、日ごとに人数が増えていったんと。

それからパウロらは(中部の)アジア州で御言葉を語るんを聖霊に禁じられたんで、(北部の)フリギア・ガラテヤ地方を通らにゃいけんようになった。ミシアの近くまで来て、ピティニア州に行こう思うたら、イエス様の霊がこれを許してんなかつた。ほいで、仕方がないけえ、ミシアを通過ってトロアス(いう港町)まで来てしもうた。その晩、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人がパウロの前に立って、「マケドニ

ア州に渡ってきて、われらを助けてつかあさい(下さい)」言うて懇願したんじゃ。パウロがこの幻を見たけえ、われらはすぐにマケドニアへ行くことにした。マケドニア人に福音を伝えるために、われらは神様に召されたと確信したけえじゃ。

われらはトロアスから船に乗り、サモトラケ島に寄って、翌日ネアポリスの港に着いた。ほいで、マケドニア州一の町で、ローマの植民都市じゃったフィリピに行き、その町に数日滞在することにした。安息日に町の門を出て、祈り場(会堂のない町でユダヤ人が集まっていた場所)があるじゃろう思われた川岸に行ったんじゃ。ほいで、われらもそこへ座って、集まっとった婦人らに話しをしたんじゃ。そこに、ティアティア市の紫布の商人で、リディアいう敬虔な婦人がおったんじゃが、主が彼女の心を開いてくれちゃったけえ、パウロの話しをよう聞きよった。ほいで、彼女も家族のもん(者)も信じて洗礼を受けたんじゃ。そんなとき、「うち(私)をほんまのクリスチャンじゃあ思うんなら、うちがた(わが家)で泊まってつかあさい」言うて頼むけえ、そうすることにしたんじゃ。

われらは、祈り場行く途中で、占いの霊に取り憑かれとる女奴隷におうた(会った)。この女は、占いで主人たちをえろう儲けさしとった。女は、パウロやわれらの後についてきて、「この人らは、偉大な神様の僕で、あんたらに救いの道を伝えよってんよ」いうておらびまわしよった(叫びまわる)。こがいな(このような)ことが何日も続いたけえ、パウロはこらえられんようになって、振り向いてその霊に、「イエス・キリストに成り代わって命じる。その女から出て行け。」言うたんよ。ほしたら、たちまち霊が女から出て行った。この女の主人らは、金づるを失のうてしもうたもんじゃけえ、(逆恨みして)、パウロとシラスをつかまえて、町の役人に引き渡そう思うて広場に引きずって行ったんよ。ほいで、二人を長官らに引き渡してこう言うた。「こんならは(この人たちば)ユダヤ人で、われらの町をかき乱ししょうります。ローマ帝国の市民であるわれらには許されとらん風習を言い広めよるんです。」集まったもんらも一緒になって二人を責め立てたけえ、長官らは二人の着物をはいで、「鞭打ちにせえ」いうて命じた。ほいで、なんべんも(何度も)鞭で打たしてから牢屋にぶち込んで、看守にしっかり見張っとくよう命じたんじゃ。そう言われた看守は、二人を一番奥の牢に入れて、足に足枷をはめて逃げられんようにした。

ところが真夜中ごろ、パウロとシラスは(そんなひどい目にあったのに)賛美を歌いながら、神様に祈りよった。ほかの囚人らは聞きほれとったんじゃ。そこへ突然、大地震が起こって、牢屋の土台ごと揺れあげて、牢の扉がいっぺんに開き、囚人の鎖がみな外れてしもうた。目を覚ました看守は、牢の扉がみな開いとるんを見て、囚人らがみな逃げてしもうたと思ひこんで、刀を抜いて自殺しかけた。パウロは、「早まるな。われらはみなここにおる。」言うておらんだんじゃ(叫んだ)。看守は明かりを持ってこらして牢の中に駆け込み、パウロとシラスを外に連れ出して、二人の前に震えながらひれ伏して言うた。「先生がた、救われるにんはどうしたらええでしょうか。」二人は言うた。「主イエス様を信じんさい。ほしたら、あんたもあんたの家族も救われるけえ。」看守が家のもん全員を連れてきたけえ、パウロはみなにイエス様のことを話して聞かした。(ここにきてようやく)看守は、二人の打ち傷の手当をして、自分と家族のもん全員に洗礼を授けてもろうた。ほいで、二人を自分の家に案内して食事を出し、家族そろってほんまの神様を信じるようになったことを喜んだんと。

次の朝、長官らは下役を差し向けて、「あんならを釈放せえ」と言わせた。ほいで、看守はパウロに、「長官らが、先生らを釈放せえ、言うてきました。晴れて自由の身です。安心して行って下さい。」言うた。ところが、パウロは下役らをつかまえて言うた。「われらは市民権を持つ立派なローマ市民じゃ。それなのに長官らは、正式な裁判もせんと、われらを公衆の面前で鞭打ち、投獄したんじゃ。今んなつて隠れて釈放しよう言うんか。そがいなバカなことがあるかい。長官らが直々にここへ来て、われらを連れ出すんがスジじゃろうが。」下役らはこの言葉を長官らに報告した。長官らは、二人がローマ帝国の市民権を持つとるいうことを聞いて震え上がり、飛んできてわびを言い、二人を牢から連れ出して、町から出て行ってくれるよう頼んだんじゃ。牢を出た二人は、再びリディアの家に行って仲間へ会い、みなを励ましてから出発した。

第17章

パウロとシラスは、アンフィポリスとアポロニアを通過してテサロニケに着いた。ここにはユダヤ人の会堂(シナゴグ)があった。パウロはいっつもやっつるように、ユダヤ人の集まる会堂に行って、3回の安息日にわたって(旧約)聖書をもとに論じおう(合)た。

ほいで、「キリストは苦しみを受け、死者の中から復活することになつとる」ことと、「このキリストとはわしが伝えとるイエス様のことじゃ」言うて論証したんよ。聞いとるもの何人かは信じて、パウロとシラスにしたごうた(従った)。その中には真の神様を信じる多くのギリシア人や、町のお偉いさんの夫人らもようけ(大勢)おった。

ユダヤ人らはそのことを妬み、町のならずもん(者)をかきあつめて暴動を起こし、町を大騒ぎにした後で(パウロとシラスが宿泊していた)ヤソンの家を襲い、二人を民衆の前に引き出そうとして搜した。ほいじゃが、二人が見つからんけえ、ヤソンと教会の仲間らを何人か町の役人のところへ引きずって行って、おらんで(大声で)言うた。「今世の中を騒がしとる連中が、この町にも来とるでえ。ヤソンはあんらをかかもうとるんじゃ。あんらにはローマ皇帝の勅令に背いて、『イエスいう別の王様がおる』言うて言いふらしようるんじゃ。」これを聞いた民衆と町の役人らは不安になって、ヤソンと仲間らから保証金を取って釈放したんじゃ。

教会の仲間らは、その夜の内にパウロとシラスをベレアへ送り出した。二人はそこに到着すると、ユダヤ人の会堂に行った。ここのユダヤ人らは、テサロニケのユダヤ人より素直で、ブチ(非常に)熱心に御言葉を学び、そのとおりでどうか、毎日、聖書を調べたんじゃ。ほいで、そのうちのようけのもん(多くの人たち)が信じ、ギリシア人の上流婦人や男らもすくうなかつた。ほいじゃが、テサロニケのユダヤ人らは、ベレアでもパウロが神様の言葉を伝えとると知ると、この町にも押しかけて来て、民衆を扇動して騒ぎを起こしたんじゃ。仲間らは直ぐにパウロを連れて海の方へ逃がしたが、シラスとテモテはベレアに残とった。パウロに付きそつた人らは、そのままアテネまで連れて行った。パウロは、シラスとテモテに、できるだけはよう(早く)アテネに来るよう、付きそつた人らにことづけた。

二人が来るのをアテネで待つとったパウロは、この町に偶像がようけえ(多くの)あるんを見て、腹が立ってきた。ほんで、(ユダヤ人の)会堂ではユダヤ人や真の神様を信じる人らと議論し、町の広場では出おうた人らと毎日議論した。そこには、エピクロス派やストア派の哲学者も何人かおつたが、「このおしゃべりは何が言いたいんかいのう」とか、「こんなは外国の神さんを押しつけよるで」いうて言いよつた。

パウロが、イエス様と復活について話しよったけえじゃ。ほいで、連中はパウロをアレオパゴス(アテネの中心地)に連れて行き、こう言うた。「おまえがしゃべりようる新しい教えがどんなもんか、よう聞かしてくれんか。いなげな(奇妙な)ことを言いよるようじゃが、どがいな意味があるんかいのう。」アテネの住民やそこを訪れる人らは、何でもええけえ耳新しいことを聞いたがとったんじゃ。

パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言うた。「アテネの皆さん。皆さんはどっから見ても信心深い方じゃ思います。道々、あんたらが拝みよってのもの(物)を見よったら、『名無しの神様』いう祭壇を見つけました。ほいじゃけ、あんたらが名前も知らんと拝みよるもんを教えあげましよう。この世界とその中のすべてのもんを造られた神様が、その方じゃ。この神様は天地万物の主(ぬし)じゃけえ、人間の手で造ったお宮なんかにはや住まりやせん。それに、何もいりやあせんのもんじゃけえ、人間が世話せにやいけんこともない。むしろわしら人間に命と息といるもんを残らず与えて下さるんがこの神様じゃけえのう。神様は、ひとりの人からすべての民族を造り出して、地上のあらゆる所に住ませ、時代を支配し、地境をお決めになった。これは、人間に神様を求めさせるためじゃ。誰でも一生懸命に探し求めりや、神様を探り当てることができる。神様はわしら一人一人から離れてはおっちゃあない。わしらはその神様のうちに生き、動き、存在しとるんじゃ。あんたらのうちの詩人も、『我らはその子孫である』、言うとるじゃろう。わしら(人間でさえ)神様の子孫なんじゃけえ、まして神様御自身を、人の手で造った金や銀や石の像にしちゃあいけまあ。神様はこれを人間の無知として見逃してくれとっちゃたが、今は、至る所で、あらゆる人々に、心を入れ替えるよう命じとってじゃ。そりやあのう、神様はお立てになった一人のお方(イエス・キリスト)の義の業によって、この世界をお裁きになる日を決めちゃったけえじゃ。神様はこのお方を死人の中から復活させることで、それが確かなことじゃと証明しちやった。」死者の復活の話しを聞くと、あるもん(者)はあざ笑い、あるもんは、「その話しはまた今度聞かしてもらわうわ」、言うたんじゃ。パウロは(この反応に少し落胆して)その場を離れたんじゃ。ほいじゃが、パウロの話聞いて信仰に入ったもんもおった。その中には、アレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスいう名前の女性、他にも何人かおったんと。

第18章

その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。ここで、ポントス州出身のアキラいうユダヤ人と奥さんのプリスキラにでおうた(出会った)。クラウディウス帝がユダヤ人をみなローマから追い出したけえ、近ごろイタリアからきとったんじゃ。パウロはこの二人んとこ(所)を訪ねて、同じ仕事をしよったけえ、そんなにら(彼ら)の家に住み込んで、一緒に仕事をしたんよ。その仕事いうんは“テント造り”じゃった。パウロは安息日ごとに(ユダヤ人の)会堂で語り、ユダヤ人やギリシア人を説得しよう努めよった。シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは(仕事を止めて)もつばら御言葉を語り、ユダヤ人に向かつては、イエス様が約束されたメシアじゃいうて証言した。ほいじゃが、ユダヤ人らが反抗して、かばちたれる(文句を言う)けえ、パウロは服の塵を払い落として言うたんじゃ。「おまえらの血は、おまえらの頭に降りかかれ。わしにや責任がない。今からわしやあ異邦人だけに伝える!」パウロは会堂を出て、真の神様を信じるティティオ・ユストいう(異邦人の)人の家に行った。(いうても)その家は会堂の隣じゃった。(ユダヤ人である)会堂長のクリスポは、何と一家をあけて主イエス様を信じた。それに、コリントの人らもようけ(多く)パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けたんよ。

ある晩のこと、主イエス様は幻の中でこう言うちやった。「恐れず語り続けんさい。黙っちゃいけん。わしがあんたと一緒におる。あんたの身の安全はわしが保証しちやる。この町には、わしの民がようけえ(大勢)おるけえのう。」パウロは(この言葉に意を固くして)1年6ヶ月コリントに腰を据えて神様の言葉をみなに教えたんじゃ。ところが、ガリオンがアカイア州の地方総督じゃったとき、ユダヤ人らが徒党を組んでパウロを襲い、法廷に引きずって行ったんじゃ。ほいで、「こんなは(この人ば)、わしらの律法に反するやり方で神を礼拝するように説いてまわりよんです」言うた。パウロが反論しよう思うた時、ガリオンがユダヤ人に言うた。「ユダヤ人よ、不法行為か悪質な犯罪ならおまえらの訴えを取り上げちやらんこともないが、おまえらの言葉やら名前やら律法やらのことなら、自分らで勝手にやってくれ。わしやあそがいなことに関わるつもりはないけえ。」ほいでみなを法廷から追い出した。ところが、(気がスマン)連中は、会堂長のロステネ(クリスポの後継者)をひつつかまえて、法廷の前でボコボコにした。総督の

ガリオンは見ても見んぷりをしとった。

それでもパウロはあきらめずにコリントにしばらく留まっとったが、コリントでできた仲間らに別れを告げて、シリア州に向けて出帆した。プリスキラとアキラも一緒じゃった。パウロは願ひ事がかのうた(叶った)んで、ケンクレアイで頭を剃った。エフェソに立ち寄った折りに、パウロは二人を置いて自分一人でユダヤ人の会堂に行って、ユダヤ人と論じおうた(合った)。その人らはもうちいと(少し)おってくれるよう頼んだが、パウロは断り、「神様の御心じゃったら、また戻って来ますけえ」いうて約束して、エフェソから船出した。

カイサリアに着いて、教会に報告するためにエルサレムに上り、それからアンティオキアに戻った。パウロはしばらくそこにおったんじゃが、また直ぐに旅支度をして、ガラテヤやフリギアの地方に出かけていき、弟子らを励ましたんじゃ。

